

繊維機械金属等を中心として、四十数社に及び、工業出荷額も、八一億円から、一、三三五億円に伸びて参りました。最近では、若年労働力を目当てにして、阪神地方から本県内に軽工業が進出して来る傾向が、特異な現象として注目されております。

なお、熊本国体の際御視察頂きました熊本市の井関農機はその後益々発展して施設設備を拡充し、現在では国の内外を通じて主要な脱穀機工場となっており、八代市の十條製紙もまた本年同社の小倉工場等を合併し拡充発展の一途を辿っております。

豊かな観光資源を生かして

次に観光について申し上げます。

本県は従来、阿蘇噴火口、熊本市及びその周辺の史跡等を主たる観光資源とし、別府雲仙の間に挟まれた通過観光地の観を呈しておったのでありますが、一昨年、九州横断道路の開通以来、阿蘇の景観は、九重及び外輪山の大草原を加えてその面目を一新し、更に今般、天草五橋の開通によって、優れた海と島嶼の風景を加え、一躍天下の観光県に仲間入りをする事になりました。観光県として認められるにつれて、従来からありました球磨川下り、菊池溪谷、県下各地の温泉郷等もまた、世間から見直されるようになり、本年は観光人員数一千三百万人、観光収入二百億円に達するものと予想しております。観光事業のため、本県に投資する県内外の事業

家も多く、観光事業は今や、押しも押されぬ本県の第四次産業に発展しつつございます。これから一層観光施設を整備すると共に、観光県に相応しい県民の心構えを順致して参らねばならぬと存じております。

人づくりの促進

次に教育について申し上げます。

ここ数年間は戦後に生まれました子供達が高校教育を受ける所謂高校生徒急増期に当りました。県としてはこの時期に当り、農業高校の施設設備の近代化を図ると共に、工業高校四校を新設し、主として産業教育の振興に力を注いで参りました。又、本日御視察を仰ぎました国立青年の家を誘致する等の方法により働く青少年の社会教育にも努力して参りました。このことは、以上に申し上げましたように、県の農業を近代化し県産業の工業化を図る等、県勢振興の上に寄与するところが少くなくと信じます。

縮まる所得格差

最後に県民所得について申し上げます。

昭和三十年から三十五年にかけては、国全体としては重化学工業を中心として、高度の経済成長を遂げた時期でありましたが、主として米作りにより依存していた我が熊本県は、この成長に取り残され、国民所得と県民所得の格差は益々拡大する傾向にありました。然しながら熊本国体の後、昭和三十六年には、新たに県計画を策

定し、農業の近代化を図ると共に、産業基盤の整備に努め、工業化の促進と観光事業の振興に努めて参りました結果、それ以後は、毎年国の経済成長率に匹敵する高い成長を遂げ、地域格差は漸次、縮小する傾向にあります。特に昭和三十九年は、全国の農業が、対前年比八・一％の増加であったのに対し、本県農業は、一五・三％、工業も全国が一五％の伸びであったのに対し、本県は一六・八％と、全国平均より高い伸びを示しました。その結果、今では県民一人当りの分配所得は全国平均の約八〇・二％、金額にして二十二万円に達している状況であります。

従来熊本県内では、平坦部の所得水準が高く、阿蘇地方のような山間部と、天草地方のような島嶼部の所得水準が低く、その為に全体としての平均所得が、引下げられていたのであります。が、今後は、九州横断道路と天草五橋の開通によって、阿蘇及び天草の所得水準が上りますので、熊本県全体としての平均所得が向上するとは間違いあるまいと存じます。

阿蘇の横断道路並びに天草五橋の開通を、このような立場から、直接住民の福祉向上に結びつけて参りたいと考えておりますことを申し上げます。私の奏上を終わります。

(注・タイトル及び中見出しは奏上文にはありませんでしたが、編集の都合上、編集係において後でつけたものです。)

阿蘇見参

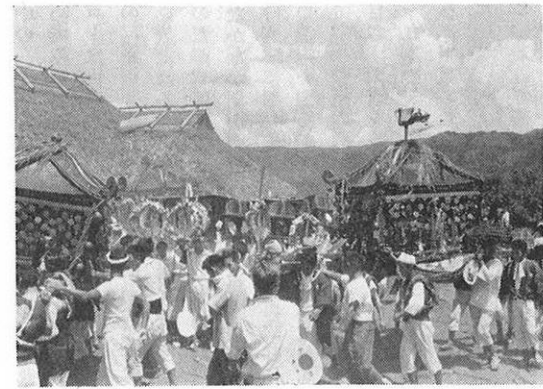
庶民的でユーモラスな阿蘇の神様たち

丸山学

□ 神主さんがお馬に乗って嫁探し

阿蘇にはめずらしいものが多い。たえば、村の娘さんが毎年一人えらばれて夏の

神話に富む阿蘇地方には、お祭りも多い……



終りの頃から、秋の霜が降りはじめます。日ごと夜ごと、神様の室をぬくめ、神様をまわつた上で、室がまわつたところまで火を焚き続ける。九十日間も焚き続けたあげく、最後の日には、はだしてその火の上を歩いて渡る。

いつ頃からはじまったものか、おそろく神々が日本をじかに治めていられた時代からのことだと思われるが、それを昭和の今日でも、一年も欠がすことがなく守っているのが阿蘇である。

まだある――

神様が毎年新しいお嫁様を山から迎えられる。町の人々が、その花嫁行列を出迎えて、てんでに大きな萱の束に火をつけたものを振りまわして、歓迎のパーティをひらき、町全体が火の海となる。この祭をゴゼムカエと云うのだが、その花嫁御と云うのが、実は阿蘇の山に生えているカシの木なのである。神主さんがお馬に乗って山に入り、目かくしをして森の中を歩かまわって、お嫁さんを探しあて、お化粧をさせ、衣裳を着せて、お宮まで連れてかえり、オミコンの中に入れ

て、三三九度のサカズキを済ますのであります。

ただめずらしいことがある――阿蘇神社を出た神主さんが、二手にわかれて田圃の中を、ホーホーと風を呼びながら、狩衣の袖をひるがえしつつ、外輪山の麓にある風宮様まで、風を逐いつめて、そこに封じ込める祭がある。風祭である。

要するに、阿蘇のめづらしさと云うのは、神様が今の世の人々とともに生きて

いることである。神田のお田植式が済んだあとでないと、阿蘇の人々は自分たちの田に稲を植えることをしない。そして神社からいただいた来た稲種を自分の家の分に混ぜて、毎年の苗代作りをする。これなども、阿蘇で米作りがはじまった年からずっと続いているしきたりにちがいない。そして毎日、お山の煙の靡く方向によって、明日の農作業の計画をするのである。つまり阿蘇では米の種をお宮から貰い、お宮の指図の通りに稲を育てとれたお米は、そのお初穂を、まず神社に捧げる。つまりは、大明神様のためにそのお米を作り、そのおさがりをいただく、人間どもが生きているのである。

みんなが大明神様の子である。

だから、阿蘇では、誰をつかまえて訊いてみても、大明神様についての物語を知っている。およそ、神話なんでものは地上の他の部分では、ひからびた文献の中に、辛うじてその痕跡をとどめている

ものであるが、わが阿蘇地方では、いまま今日、庶民の日常生活の中に生きて、談られている。

□ 尻餅ついて「余はもう立てぬ(立野)」

熊本市から阿蘇に入る火口瀬のV字型の坂道で、バスの車掌がまず創生紀のすばらしい国造り神話を話してくる。

……満々と水を漂えた阿蘇谷を見下して、この水をどこかで切り落したら必ずよい米がたくさんとれるようになるだろうと思召して、大明神様が外輪山の一角をお蹴りになりました。しかし、水は一向に流れ落ちません。それも道理よくよく御覧になると、そこは二重の峠と申しまして、山が二重になったところでした。

……大明神様は、そこでまた外輪山をぐるっと見渡して、ここぞと思うところを、力一杯に蹴破られますと、湖の水はどっと流れ出て、谷の中はゆたかな水田となりました。そして、大明神様は、この時あまりに力をこめて蹴られたので、尻餅をついて、ひっくりかえり、おどろいて手をさし伸べた家来に、「余はもう立てぬ」とおっしゃったので、この地名を、今も立野と申します……

大明神様はなかなか庶民的で、ユーモラスな神様である。鬼八と云うお氣に入りの家来を連れて、毎日、谷の中を狐を射たのしんで居られる。そして五岳の